【資料紹介】 近世琉球の肖像画

平 川 信 幸

Notes on Historical Materials for Effigies in the Ryukyu Kingdom

Nobuyuki HIRAKAWA

沖縄県立博物館・美術館,博物館紀要 第1号別刷 2008年3月31日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.1

March, 2008

資料紹介 近世琉球の肖像画

平川信幸*

Notes on Historical Materials for Effigies in the Ryukyu Kingdom Nobuyuki HIRAKAWA *

はじめに

県立博物館には現在、「袋中上人自賛画像」、「魏学源肖像画」、「鄭和橋肖像画」の3件肖像画を所蔵し、寄託資料として「程順則朝服像」、「程順則清朝朝服像」、「木村探元筆程順則像」3件を保管している。特に「程順則琉球朝服像」は今後の研究によって琉球の絵画史に新たな展開をもたらすものと思われる。また、本作品は近年まで沖縄戦で焼失していたものと思われていた資料で、鎌倉芳太郎氏の『沖縄文化の遺宝』(鎌倉芳太郎〔1982〕)に掲載された戦前の写真でのみでしか見ることが出来なかったが、御所蔵者の戦中・戦後の血の滲むような努力によって今日まで残り、当館で展示・公開する運びとなった。

御後絵を含め、琉球で描かれた肖像画は優れた ものが多く、琉球の絵画に於いて特筆すべき分野 となっている。

本稿では戦前戦後の肖像画に関する研究史と共に 近世琉球期に琉球、中国、薩摩で描かれた肖像画 5 件の特徴を紹介する。

沖縄の肖像画に関する先行研究

1911年(明治44) 5月に旧沖縄県立図書館で名護家が所蔵する「程順則琉装像」、「程順則清朝朝服像」、「木村探元筆程順則像」の3件と美術教師山口瑞雨が模写した「程順則琉装像」が展示された。程順則の肖像画は人々を魅了し新聞紙面を賑わしたようである。当時の新聞記事は展示の様子や程順則の人柄に触れたもので研究までにはいたらないが、後に東恩納寛惇氏、真境名安興氏などの研究者が図書館で目にした肖像画について回想している。その

約10年後の1922年(大正11)に真境名安興氏が『沖縄一千史』を出版しており、「第三章文化と工芸」のところで琉球で最も古い絵画の作例として「察度王の絵像」を挙げ、程順則の「琉装像」と「木村探元筆程順則像」を比べて、近世琉球期に絵画の画風を概観した「沖縄の画風」として解説を行っている。真境名氏が『沖縄一千年史』を出版する前年の1921(大正10)年の春頃に、王府最後の絵師長嶺華国氏からの記述をもとに末吉安恭氏が『沖縄タイムス』に「琉球画人伝」を連載している。この連載は啓明会の援助を受けて沖縄に芸術調査に入る鎌倉芳太郎氏に影響を与えている。また、真境名氏の美術関係の記述には華国氏からの聞き取りとするところがあることから『沖縄一千年』の「第三章文化と工芸」へ多大な影響を与えたと考えられる。

鎌倉氏はもともと沖縄県女子師範学校の美術教員として沖縄に赴任するが、1924年(大正13)に啓明会の援助を受けて芸術調査として沖縄に入り、その後1937年(昭和12)まで何度か沖縄で調査を行っている。その際に絵画の調査を行っており、多くの肖像画の写真と共に詳細な記述が記録された。この調査には沖縄の研究者も何人か随行していたようで、特に比嘉朝健氏の発表した論文には画題や構図などが鎌倉氏のものと共通する写真が何枚か掲載されており、芸術調査時に深く関わっていたことが分かっている。

この芸術調査の成果の1つが1925 (大正14)年11月7日から12月1日まで18回にわたって、『沖縄タイムス』に連載された「尚侯爵家御後絵について」である。この連載は琉球国王の肖像画「御後絵」を

[※] 沖縄県立博物館・美術館 〒 900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1 Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

軸に琉球絵画の始まりから比嘉氏が実際に調査した 絵画作品やその画家の特徴まで述べられており、作 品が亡失した現在では、貴重な論考といえる。その 後、この記事はまとめられ、『国華』に 1935 年(昭 和 10)から 1937 年(昭和 12)に「琉球の歴代国 王画像について」として4回にわたり掲載された。 また、比嘉氏は同じく『国華』に「琉球の肖像画と 其進展」を発表している。この論文は先の「琉球の 歴代国王画像について」をさらに肖像画に焦点を絞 り、国王の肖像以外にも「程順則」と「前川親方」 の肖像の特徴について考察しており、肖像画につい てのはじめて論考といえる。

鎌倉氏は沖縄での調査の成果の一部を1926年(昭和元)出版された平凡社の『世界美術全集』の美術作品の図版ともに「琉球美術各論」という形で発表している。絵画作品では、殷元良や呉着温などの作品と「御後絵」、「前川親方肖像」などの肖像画も掲載された。この『世界美術全集』は西洋、アジア諸国、日本の美術など世界の美術の中に琉球の美術を紹介しているところが当時としては画期的なことではなったかと思われる。

沖縄戦以前の肖像画の研究は、王朝時代を知るインフォーマントなどからの聞き取り調査と、旧家に残る美術作品の調査をもとにふんだんに残る文献から裏付けていくという作業が御後絵を中心に研究が行われてきた。御後絵は歴代の国王ごとに描かれ、しかも、琉球画壇の中心となる絵師や画家が描いていることから一つの基準になりやすかったことと、作品としての魅力が要因だと考えられる。しかし、着実に進んでいたかのように見えた肖像画を含めた絵画史の研究も一つの時代がおわり、沖縄戦よって長い停滞期に入る。

アメリカ軍政府の施政下という特殊な状況が終わった1972年(昭和47)、鎌倉氏が戦前に撮影した写真の展示会「50年前の沖縄-写真で見る失われた遺宝展」がサントリー美術館で開催され、これを機会に鎌倉氏の調査の成果が『沖縄文化の遺宝』として出版された。『沖縄文化の遺宝』にはこれまで知られていなかった多くの肖像画が掲載されており、その後の御後絵をはじめとする肖像画の研究に欠かせないものとなっている。また、1977年(昭和52)に沖縄県教育庁文化課による県内絵画遺品調査の報

告書は、沖縄戦によって状況が分からなくなっていた県内の絵画作品の現状を把握するものとなっており、当館が所蔵する「魏学源肖像画」、「北京駐在都通事鄭和橋肖像画」他三点の肖像画が掲載されている。この他に1989年(平成元)に出版された沖縄タイム社の『沖縄美術全集4 絵画・書』には「片目地頭代絜聡肖像」が掲載されている。

1972年から1989年までを肖像画研究における調査報告の時期とすれば、1990年代はまさに新しい研究が始まった時期である。

まず、上江洲敏夫氏が「御後絵(国王肖像画)につ いて」において比嘉氏の「歴代琉球画家譜」や鎌倉 氏の研究を踏まえ、御後絵を制作した画家をまとめ、 あらたに「益士仁」という制作者を加え、その家譜 から、これまで具体的に分からなかった御後絵の制 作方法を明らかにした。次に豊見山和行氏は御後絵 を構造的に捉え、家臣団と国王の大きさの比率など から近世琉球期の王権の変化まで踏み込んでいる。 また、佐藤文彦氏は御後絵の構成要素を分解し、イ コノロジー的な手法で御後絵と東アジアの各国国王 の肖像画を比較し、そのモチーフの広がりを考察し た意欲的な論考となっている。稿者は、御後絵の構 成要素を分解し、イコノロジーによる分析に加え、 御後絵を冊封体制の儀礼の中での解釈を試みている。 このように 1990 年代の肖像画研究は御後絵を中心 に行われたが、2005年(平成17)に入り北九州市 立大学の錦織亮介氏によって、東恩納寛惇氏の論考 を補完するような形で程順則像の制作に関する発表 がなされ、黄檗宗はじめとする中国南部の肖像画と の関連性を示唆している。

以上、肖像画・御後絵に関する先行研究について論じてきた。家礼などに用いられた肖像画と国家儀礼に用いられた御後絵の研究は本来、それぞれのことなる背景から個々に考察がなされるべきではあるが、琉球絵画は宮廷絵画を大きな幹としてそれぞれの目的に合わせて枝を広げていく樹木のようなものだと考えられる。つまり、御後絵や宮廷の絵画をその技法の頂点とし、その広がりとして家臣の肖像画や工芸作品の下絵があった。そのため、今後の研究においては、技法を体系的に探ることは重要であると考えられる。

作品解説

程順則像3件

人物

程順則

(1663(康熙2)·10·28~1734(雍正12)·12·8)

久米村程氏の7世、童名は思武太、字は寵文、号は念奄、名護親方、または名護聖人とよばれた。程氏は河南夫子の後裔とされる。琉球国相兼左長史であった程復はその先祖であるという。その子孫が5代で滅び、虞氏京阿波根から入って程氏をついだのが順則の父泰詐である。

程順則は1706 (康熙 46) 年には正議大夫として 渡閏し、自分で60金を出して、『六論衍義』と『指 南広義』を刊行して帰った。『六論衍義』は、薩摩を へて将軍吉宗に献上され、和訳されて江戸時代、庶 民教育のテキストとして広く用いられた。『指南広 義』は順則の著書で、中国渡航船の指針となったも のである。1713年(康熙 52)、将軍徳川家継の襲封 慶賀の江戸上りで、掌翰使となり、宮里親雲上の名 で従った。江戸滞在中、井白石は彼との会見で『南 島志』や『采覧異言』の資料を得たといわれる。江 戸からの帰途、前の関白太政大臣近衛家熙の招きに より、京都鴨川の別荘物外楼に訪れ『物外楼記』な らびに詩を制作した。

作品説明

①程順則琉球朝服像

紙本着彩軸装

作品の状態は比較的よいが、程順則像の胸から足にかけて絵の具が剥落している。左袖の下の部分に 墨と落款が水で流れたような跡があり、うっすらと 墨と朱が残っている。

構図は画面中央に程順則を配し、青と緑の花模様の布をかけた地色の曲泉に坐り、正面を向いた倚像で描かれている。衣装は紫色の八巻を被り、襟元がしっかりと閉まる琉縫い雲の模様の上衣を纏い、龍文緞子の大帯をしめ、中国風の靴を履いたものとなっている。顔は繊細なグラデーションの印影法によって写実的な表現となっており、西洋的な技法が用いられている。それに対して衣装や曲泉などは太い輪郭線によって、平面的な描写がなされており、

より程順則の顔が強調され、その存在感を引き立てる効果となっている。冠の色や龍文緞子の大帯から三司官・親方クラスであることが分かり、年齢的に紫金大夫に昇った五十三歳以降の姿を写している。曲彔に掛けられた布の描写は平面的であるが丁寧に描かれており、花の模様の輪郭が金泥で縁取られている。花の輪郭を金泥で縁取る表現は大和文華館所蔵の呉師虔筆「花鳥画」に見られ、今回紹介する中国で描かれた「程順則清朝朝服像」「魏学源像」「北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像」の三点の肖像画には見られない。本作品は呉師虔の弟子の殷元良作という伝承があるが、戦前に作品を見た東恩納寛はその作風や描かれた時代背景から中国で描かれたものであるとしている。

今後、多くの考察を必要とするが、曲彔に掛けられた布の描写は、この像の制作に関わる重要な部分だと考えられる。また、顔の描写についても戦前に御後絵をはじめとする多くの肖像画を実際に見た鎌倉氏は、向元瑚が模写した尚敬王の御後絵と共通していると述べている。

②程順則清朝朝服像

紙本着彩軸装

中央に程順則を配し、牀とよばれる中国式のベッ トに腰掛けている姿で描かれている。この作品の特 徴は程順則が清朝の官帽を被り、その服を着ている ところにある。琉球では大礼とよばれる王府の重要 な儀礼に際して明朝の官服を着用していたが、清朝 の順治帝の北京入京後の1645年に久米村を除く王 府の役人は琉球の服を着用するように定められた。 その後、久米村でも1650年に明朝の服から琉球の 服装へ習俗を改めている。(『球陽 読み下し編』、 1974年)このことから基本的に琉球の役人が清朝の 官帽を被ることないと考えられ、興味深い作品と なっている。程順則琉球朝服像と同じように、顔は 繊細なグラデーションの印影法によって写実的な表 現となっており、西洋的な技法が用いられている。 軸木には旧来の軸装から引き継いだ「程順則」とい う表題が貼られていることから、程順則像と伝世し ている作品である。顔は残念ながら絵の具が落ちて いるため、肌色一色で塗られたようになっている。 体の描写は強弱のある細い輪郭によって描かれてい

る。また、爪の描写が前作と違い、鋭く長めに描か れている。

作品の状態は水に浸かったために全体的に色が落 ちているが作品の状態は良好である。

③木村探元筆程順則像

絹本着彩軸装

作者の木村探元は17世紀末から18世紀に活躍した薩摩を代表する画家で地元の薩摩で小浜常慶に画を学び、1703年(康熙42元禄16)に江戸へ赴き、狩野探幽の子探信に弟子入りしている。また、雪舟や秋月等観らの影響を受けいる。著書に薩摩の絵画、工芸、茶道、文学を論じた『三暁庵談話』などがある。

程順則は1714年(康熙 56 享保 2)、七代将軍 徳川家継就任を賀する慶賀使の掌翰使として江戸へ 行っており、その帰りに島津吉貴に木村探元の絵に 画賛を書くことを命じられた。そのため、程順則は 他の使節のメンバーと離れて一人滞在し、この肖像 画はその時に描かれたものといわれている。

像主の顔は、琉球朝服像とは対照的に細かい線によって描かれおり、髭を蓄えた端正な面持ちは程順則の穏和な人柄をよくあらわしている。衣装は強弱のある太い線によって輪郭と衣文をあらわし、顔の表現とはまた違ったものとなっている。像主の背景に梅の木、書籍と珊瑚を挿した花瓶を載せた文机を配し、中央に唐衣装を斜め向きの姿で地面に坐る程順則が描かれている。後方の文机の上の書籍、手前の書籍は程順則の学識の深さを表現していると考えられる。寒さに耐えて咲く梅は学問の神、菅原道真との関係を想起させるが、これは今後の課題としたい。画面左側には探元自筆で「雪堂行楽図呈寵文老先生併求教正」の銘と「薩摩探元筆」の落款がある。朱文印は「懐雲」、自印は「黄瑞居士」となっている。

魏学源像

人物

魏学源

(1793(乾隆 52)・6・6~1843(道光 23)・7・4) 『新集科律』の編集者。楚南親雲上、童名は松金、字は有淵。久米村の出身で、1815年(嘉慶 20)から 18 年まで鄭良弼とともに『大清律例』を中国福建で 学ぶ。

1819年(嘉慶 24) 2月から 20年(道光元) 9 月まで平等所大屋子見習師となり、安国寺で『大清 律例』を講義。1822年(道光 2) 7月から 27年 (道光 7) 2月まで作漢文司兼述作総師を務め、同 時に 22年8月 28日、鄭良弼とともに科律編修係に なる。この係の設置は、1786年(乾隆 51)に制定 された『琉球科律』に条目を追加するのが目的であっ た。1831年(乾隆 31) 4月、ふたたび平等所大屋 子見習師となり、『大清律例』を講義、同年8月、良 弼と共に『新集科律』16巻 95条(序文による)を 制定した。学源はそのほか、存留通事、北京大通事、 異国大夫、南風平等、講解師、国学講解師なども務 めている。

作品説明

紙本着彩軸装

画面中央に琉球の髪型、片髻(かたかしら)を結い、琉縫いで仕立てられた、藍の衿に茶色地に黄色の縞の衣装を纏い細帯を結び、中国風の靴を履いた姿で描かれている。画面右下には、琉縫いの浅地の着物に、中国風の防寒具唐フィーターを羽織り、足袋に草履(サバ)を履いた伴臣がしゃがみ、炉に広げた扇子で風を送り、薬罐でお湯を沸かすような姿で描かれている。いずれも顔の描写は薄い線で輪郭をとり、絵の具の濃淡によって顔の形を捉えている。衣装は線で輪郭をとり濃淡によって衣文を表現しているが、顔のそれと比べると平面的な印象を受ける。背景には机とその上に文房四宝配し、伴臣の背後に陶製と思われる台座にのった梅の盆栽が配されている。作品の状態は良好である。

北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像

人物

鄭擇中(生没年不詳)

鄭宏謨

(1794(乾隆 59)・11・14 ~ 1860(咸豊 9)・10・13)

画題は「和橋肖像」となっているが、和橋は号で、 像主の諱は鄭擇中となっている。よって本稿では今 回紹介する他の作品と同じように像主の名称を鄭擇 中とする。

鄭擇中は鄭天錫の四男として生をうけた。その後、

通事として活躍したと考えられるが、父親とは家譜が別れており、その家譜が亡失してしまっているため、詳しいことは分からいない。

鄭擇中の一族は三山時代に琉球へ渡り、長史として活躍した鄭義才の子孫で、擇中は義才から数えて16世にあたり、通事として活躍している。その父天錫は擇中とは対照的に国内で事務官として職務を終えたようである。家譜が失われている中で擇中の活躍が辛うじて推察出来るのは、肖像画の裏に書かれた表題「北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像画」と画中の添え書きの「朝京都通事、字元善、諱擇中、号和橋」、息子秀才鄭宏謨の『家譜』などからである。

秀才鄭宏謨 1794 ~ 1860 年 (乾隆 59 年~咸豊 9年) は擇中の長男であったが、叔父文中が夭折したために、文中の養子となっており、叔父の家譜にその名を残している。

作品説明

紙本着彩軸装

表具の裏に「北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像画 子宏謨留学於北京後爲琉球国忠義大夫清始洋畫伝來 未幾北京有肖像畫人筆之」という書き込まれている と共に「北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像」という張 り紙がある。この一文から作品が北京で描かれたこ とが分かる。家譜によると、鄭宏謨は1822年(道 光2年) 9月12日、中国への国費留学生、勤学と して父擇中にともなって那覇港を福州へ向けて出航 している。父の擇中一行は馬歯山(慶良間島)まで 順調に船は進んでいたが、旋風に合い浙江省温州ま で流され、ようやく10月中頃に福州たどりついて いる。その後、一行は公務のために北京へ向かい、 翌年の1月4日に入京している。この肖像画はこの とき北京で描かれたものだと思われ、毛皮で出来た、 体全体を覆う外套のような衣装を着込んだ姿が描か れているところに、北京の厳しい冬を思わせる。

さて、画面に目を向けると中央に像主の擇中、その左横に息子の宏謨、画面、左下に翁良允が描かれている。 擇中、宏謨の頭上にはそれぞれ「朝京都通事鄭公字元善諱擇中号和橋」、「秀才鄭宏謨」、翁良允の右肩には「伴臣翁良允」と、名前が記載されている。 顔の描写は輪郭線は描かずに色の濃淡のみによって描かれている。 衣装は強弱のある線で輪

郭と衣文が描写され、かなり平面的なものとなっている。人物は琉球の習俗である片髻と中国清朝の冬の衣装を来ている姿で描かれており、独特の雰囲気を感じさせる。背景は魏学源と同じように机とその上に文房四宝配し、陶製と思われる台座にのった松の盆栽が配されている。また、像主の背後には山水画が描かれた屏風が描かれ、左の部分には鳥がとまった梅の木が配されている。全体的に背景の描写は人物のものと比べて雑である。

おわりに

程順則像3件、中国で描かれた肖像2件の紹介を 行った。程順則像はそれぞれ、琉球の朝服像、江戸 上りの際の唐衣装、そして清朝の朝服像と江戸時代、 琉球が置かれた立場を衣装によって表しており、そ の技法もそれぞれに特徴があった。また、中国で描 かれた2件の肖像は絵画作品としても興味深いもの であったが、それ以上に描かれた当時の様子と像主 の履歴が細かく知ることが出来たことは貴重であっ た。このことから家譜と肖像画の繋がりを見ること が出来、琉球での肖像画の性格を特徴を示していた ように思われる。つまり肖像画の発展は御後絵に見 られるような王府による絵画技術の振興と共に、近 世の家譜による士族制度と先祖崇拝との密接な繋が りを考える必要がある。

参考文献

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月7日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月8日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月8日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月10日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月11日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月12日 沖縄タイムス 1925 **比嘉朝健** 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月14日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について」

『沖縄タイムス』11月15日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について(9)?」

『沖縄タイムス』11月17日 縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について(10)?」

『沖縄タイムス』11月18日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (11)」

『沖縄タイムス』11月19日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (12)」

『沖縄タイムス』11月21日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について(13)」

『沖縄タイムス』11月22日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (14)」

『沖縄タイムス』11月25日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (15)」

『沖縄タイムス』11月26日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (16)」

『沖縄タイムス』11月27日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について (17)」

『沖縄タイムス』11月29日 沖縄タイムス 1925

比嘉朝健 「尚侯爵家御後絵について(18)」

『沖縄タイムス』12月1日 沖縄タイムス 1925

下中彌三郎 『世界美術全集第二十一巻』

平凡社 1926

下中彌三郎 『世界美術全集第二十二巻』

平凡社 1926

比嘉朝健 「琉球の歴代国王画像について(上)」

『国華』553号 国華社 1936

比嘉朝健 「琉球の肖像画と其進展」

『塔影』 12 月号第 12 巻第 12 号 塔影社 1936

比嘉朝健 「琉球の歴代国王画像について(中)」

『国華』555号 国華社 1937

比嘉朝健 「琉球の歴代国王画像について(下)

その一」『国華』557号 国華社 1937

比嘉朝健 「琉球の歴代国王画像について(下)

その二」『国華』559号 国華社 1937

琉球政府文教局編 『沖縄県史 第19巻 資料編9』

琉球政府文教局 1969

沖縄県教育庁文化課 『重要歴史資料調査報告書Ⅱ

県内絵画遺品調査報告書』

沖縄県教育委員会 1977

琉球新報社編 『東恩納寛惇全集5』

第一書房 1978

那覇市企画部市史編集室編 『那覇市史 資料篇 第1巻6下』 那覇市役所 1980

沖縄大百科事典刊行事務局 『沖縄大百科事典 上』 沖縄タイムス社 1983

鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 岩波書店 1982

沖縄美術全集刊行委員会 『沖縄美術全集4 絵画・

書』 沖縄タイムス社 1989

ボーダーインク編 『真境名安興全集 第3巻』

琉球新報社 1993

池宮 正治 ほか編 『久米村 歴史と人物』

ひるぎ社 1993

上江洲敏夫 「御後絵(国王肖像画)について」

首里城研究会 『首里城研究』

首里城公園友の会 1995

豊見山和行 「御後絵から見た琉球王権」

高良倉吉・豊見山和行・真栄平房明編

『新しい琉球史像』 榕樹書林 1995

佐藤文彦 「図像解釈学から見た御後絵―東洋の肖

像画と御後絵一」

『沖縄県立芸術大学紀要 No.5 1997』

沖縄県立芸術大学 1995

佐藤文彦 「『御後絵』琉球国王の肖像画」

民族芸術学会編『民族芸術 VOL.13』

エーアンドエーパブリッシング 1995

平川信幸 「御後絵とその形式について」

『芸術論叢』 第 14 号 別府大学文学部芸術文化 学会 2001

錦織亮介 「名護親方 程順則の画像」

北九州市立大学文学部紀要 69 号

北九州市立大学文学部 2005

沖縄県立博物館・美術館肖像画リスト

· · ·	作日夕	作业	# 佐任	抵	法量	以田方名	計十十	10 記 4 本	r E	Ĥ	井
貝付留万	TFEID	正有	中山下产士	<i>タ</i> テ(cm)	(cm) □ =	3	加有有	旧別有有	*\X	+	重
寄託資料	程順則朝服像	不明	18 世紀	66	61	寄託	個人蔵	個人蔵	平成 19	2007	
寄託資料	程順則清朝朝服像	不明	18 世紀	87.1	34	蜂託	個人蔵	個人蔵	平成 19	2007	
寄託資料	木村探元筆程順則像	木村探元	1714	63.6	40.5	略記	個人蔵	個人蔵	平成 19	2007	探元の落款有り 朱文方印「懐雲」 白文方印「黄瑞居士」
486	袋中上人自賛画像	不明	17 世紀初頭	45.3	18.8	購入	沖縄県	中川伊作	昭和 28	1953	
KA048	魏学源肖像画	不明	1823	270	90	学芸資料	沖縄県	不明	昭和 21	1946	
2307	鄭和橋肖像画	不明	19 世紀	170	92.5	物體	沖縄県	米国民政府	昭和 39	1964	

肖像画先行研究リスト

Š	抽	温	雑誌名	出版社	発行年	無 米
	真境名安興	「程順則の肖像-南村詞兄」	『沖縄毎日新聞』	沖縄毎日新聞	1911	
2	一新人	[[葉書一括]程順則肖像画展をみて」	『沖縄毎日新聞』5月10日	沖縄毎日新聞	1911	明治 44(1911) 年 5 月 12 旧沖縄
က	南香	[名護親方の肖像 (上)]	『沖縄毎日新聞』5月13日	沖縄毎日新聞	1911	県立図書館において程順則の一当偽西紋公開された。
4	南香	[名護親方の肖像 (下)]	『沖縄毎日新聞』5月14日	沖縄毎日新聞	1911	日家国が公用された。また、 その時に山口瑞雨の模写もあ
2	展順則の人格を崇拝し且つ 絵画に趣味を有つ男	[[葉書―括]程順則肖像画展の展示]	『沖縄毎日新聞』5月15日	沖縄毎日新聞	1911	わせて公開された。
9	真境名安興	「察度王の絵像」	沖縄一千年史	小沢書店	1923	大正 11年(1922)に末吉安恭が 最後の王朝絵師長嶺華国の聞
7	真境名安興	「沖縄の画風」	沖縄一千年史	小沢書店	1923	き取りにより『沖縄タイムス に』「琉球画人伝」を発表。
∞	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月7日	沖縄タイムス	1925	
6	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月8日	沖縄タイムス	1925	
10	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月8日	沖縄タイムス	1925	
11	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月10日	沖縄タイムス	1925	
12	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月11日	沖縄タイムス	1925	
13	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月12日	沖縄タイムス	1925	
14	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月14日	沖縄タイムス	1925	鎌倉芳太郎の芸術調査に随行。 業もた絵画作号に触れてもに
15	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について」	『沖縄タイムス』11月15日	沖縄タイムス	1925	なるは低画作品に聞れており、 毎後徐夕通ご 仕辞珠禁画中夕
16	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(9)?」	『沖縄タイムス』11月17日	沖縄タイムス	1925	耳及台に近り、結を特団人にましめた感がある。新聞の連
17	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(10)?」	『沖縄タイムス』11月18日	沖縄タイムス	1925	載は10年後美術雑誌『国華』
18	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(11)」	『沖縄タイムス』11月19日	沖縄タイムス	1925	の「抗球の歴代国土画像につい」 トーナー・ト四木の論者と「キナー
19	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(12)」	『沖縄タイムス』11月21日	沖縄タイムス	1925	いこう、四弁ジョルトにおり、名のだる。
20	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(13)」	『沖縄タイムス』11月22日	沖縄タイムス	1925	
21	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(14)」	『沖縄タイムス』11月25日	沖縄タイムス	1925	
22	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(15)」	『沖縄タイムス』11月26日	沖縄タイムス	1925	
23	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(16)」	『沖縄タイムス』11月27日	沖縄タイムス	1925	
24	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(17)」	『沖縄タイムス』11月29日	沖縄タイムス	1925	
25	比嘉朝健	「尚侯爵家御後絵について(18)」	『沖縄タイムス』12月1日	沖縄タイムス	1925	
26	下中獺三郎		『世界美術全集第二十一巻』	平凡社	1926	世界の美術の中に沖縄の美術を 独立して紹介したことは画期的 な美術全集といえる。美術全集 の仕事は後に『沖縄文化の遺玉』
27	下中獨三郎		『世界美術全集第二十二巻』	平凡社	1926	へ引き継がれる。また、芸術調査の直後にまとめられていることから情報によってはより詳しい記載も出てくる。

	:	п	3 .	:	!	ı
Š Š	粉	平	雑誌名	出版社	光行年	無
28	真境名安興	「御後絵の焼失」	第十一 日から8	真境名安興	1930	
29	真境名安興	「琉球の肖像を支那に送る」	備忘録 第十一巻 3月2日から8月4日	真境名安興	1930	琉球で歴代の絵師に関する覚え 書きとなっている。
30	真境名安興	笑古漫筆「長嶺華国翁断片」	『沖縄 日 幸妃』	沖縄日報	1935	
31	真境名安興	笑古漫筆「御後絵について」	『沖縄 日 報』	沖縄日報	1935	
32	比嘉朝健	「琉球の歴代国王画像について(上)」	『国華』553号	国華社	1936	
33	比嘉朝健	「琉球の肖像画と其進展」	I塔影』12 月号第12 巻第12 号	塔影社	1936	
34	比嘉朝健	「琉球の歴代国王画像について(中)」	『国華』555 号	国華社	1937	イ論の工家国の工具の指記に付くた職地に評価するかののかの
35	比嘉朝健	「琉球の歴代国王画像について(下)その一」	『国華』557 号	国華社	1937	°°
36	比嘉朝健	「琉球の歴代国王画像について(下)その二」	『国華』559 号	国華社	1937	
37	東恩納實停	「程順則の肖像」	『沖縄今昔』3月25日	財団法人南方同胞援護会	1958	昭和7年に六論衍義に関する書籍に「程順則琉想像」の写真をつけてを発行。同18年に再販のおりに絵画の行方が分からなくなっていた。
38	沖縄県教育庁文化課		『重要歴史資料調査報告書 II 県内絵画遺品調査報告書』	沖縄県教育委員会	1977	復帰後に行われた遺品調査によって、沖縄戦を逃れた絵画作品の情報が収集される。また、復帰後の状況によって戦前沖縄で共和本表金、テ
39	鎌倉芳太郎		『沖縄文化の遺宝』	岩波書店	1982	C 立下間間を行う C 球信力 A 公
40	沖縄美術全集刊行委員会		『沖縄美術全集 4 絵画・書』	沖縄タイムス社	1989	4.1 には多くの日家に品が始載されており、御後絵をはじめとする多くの作品に直に接した鎌倉氏独自の視点で作品に対する 見解を述べている。
41	上江洲敏夫	「御後絵(国王肖像画)について」	首里城研究会『首里城研究』	首里城公園友の会	1995	
42	豊見山和行	「御後絵から見た琉球王権」	高良倉吉豊見山和行真栄平 房明編『新しい琉球史像』	榕樹書林	1995	
43	佐藤文彦	「図像解釈学から見た御後絵―東洋 の肖像画と御後絵―」	『沖縄県立芸術大学紀要 No5 1997』	沖縄県立芸術大学	1995	この時期の肖像画研究は、御後 絵を中心に行われた。
4	佐藤文彦	「伽後絵』琉球国王の肖像画」	民族芸術学会編『民族芸術 VOL.13』	HーアンドHー パブリッシング	1995	
45	平川信幸	「御後給とその形式について」	『芸術論叢』第 14 号	別府大学文学部芸術文化学会	2001	
46	錦織亮介	「名護親方 程順則の画像」	北九州市立大学文学部紀要 69 号	北九州市立大学 文学部	2005	程順則の御子孫は福岡の在住しており、福岡の展示会のおりに 程順則の肖像画が再発見された。

図 1 程順則琉球朝服像(個人蔵)



図2 程順則清朝朝服像(個人蔵)



図3 木村探元筆程順則像(個人蔵)



図4 魏学源像朝服像(沖縄県立博物館・美術館蔵)



図 5 北京駐在琉球都通事鄭和橋肖像(沖縄県立博物館·美術館蔵)

